宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像社
〒811-35　福岡県宗像郡玄海町
電話　0940－62－1311代
定価　一年送料共　1000円

神具・装束
結婚式場用品　株式会社　井筒
福岡店　福岡市博多区東公園一－三一（〒812）
電話　福岡（092）六五一－九四五六番
本店　京都市下京区油小路六条北入（〒600）
電話　京都（075）三四一－三三四一代－四番
三四三－三三四一番

献茶祭斎行

第十四代表千家家元
而妙斎千宗左宗匠奉納

十月一日午後八時といふ日時は皇大神宮遷御の刻として、かねて天皇陛下より御治定をたまはったその日その時である。当夜の儀に当っては、筆者も遷宮委員会に列なる一人として供奉するやうとの御案内をいただいたけれども、老朽のこととて衣冠着用方は拝辞して、板垣御門内の参列席において奉拝させてもらった。

○

秋の日は傾くのが早い。まして御神域深くに侍ってゐると、六時前といふのに老杉の木ぬれは影絵のやうになり、やがて闇の中に溶けこむ。御裳裾川のせせらぎの音はおろか、三千人といふ特別奉拝者の人々の気配も全く聞こえては来ない、静寂そのものである。

折から突如、遠くにきこえる第三鼓の響きでわれに帰ると、ほどなく玉砂利をふむリズミカルな沓音が次第々々に近付き、静寂さらに深まるのを覚える。玉串行事においては、勅使をはじめ襴宜にいたるまで、一人一人が、古への宇治大内人の役にあたる権襴宜から左右の手に太玉串を受けとり、順次本宮へと参入するのである。われら一同起立してお迎へする中をまづ勅使が束帯の裾を曳きながら重々の御門を奥へと進まれる。やがて池田祭主様につづいて大宮司が束帯の上にさらに明衣（あかはのきぬ）をまとひ、その上に木綿襷を十文字にかけ、冠に木綿鬘を結んだ、まことにすがすがしい姿で参入され、少宮司以下も同じ姿でこれにつづく。二十年前に両手の太玉串を固く握りしめて参進した、あの時の昂ぶった気持ちを想起して、何とぞ何とぞお滞り無く御奉仕あれよと祈りながら眺め入ったことであった。係りの者の合図に従って、御祭文奏上、御開扉とその都度起立低頭する。やがて外玉垣御門の高張の灯と中重などの庭燎が一斉に消されて深い闇が聖域を包む。前陣の先頭をすむ松明が御門の近くまできて御列が漸次ととのへられてゐる様子が察せられる。

遷御の儀を拝して

「たふとさに拝押しあひぬ」と詠じた、三百年前の昔びとがなつかしい。

めでたく遷御の儀は終へられた。ふり仰ぐ新宮の空がほのぼのと明るい。座席から月の姿は見えないけれども、陰暦八月十七日の立待ち月が中天にかかってゐるにちがひない。想ひ起せば前回は満天の星明りであった。このたびは月明が大儀をことほいでゐる。

午後八時を期して、皇居におかれては神嘉殿の前庭において、庭上下御の御儀をもって聖上御遥拝の御儀がとり行はせられてゐるはずである。皇居の空にもこの明るい月光がふりそそいでゐることであらう。

○

顧みると、当度の御遷宮に関して大宮司より宮内庁長官にお伺ひ書が提出されたのが昭和五十九年三月で、翌四月七日、御聴許の旨が長官より達せられて正式に御準備の作業が開始された、と承る。しかし、内々の準備はさらにその八年も前から進められてゐたやうに伝聞する。いふならば、第六十回のことが終るや否や、神宮司庁の当局では次なる手順が考へられたのであるがそれはさておき、正式に申してもまさに十年の歳月をかけての大事業である。

その間、両陛下よりは年ごとに御内帑金の御献進をたまはり、広汎な奉賛活動が神社界、財界そのほかの諸団体によって展開されたことは申すまでもない。御用材は御杣始祭をまってゐては到底まに合はないので、これまた早くから御杣山候補の山々で伐採されてゐたはずである。御装束、神宝の発注はるかに道楽の神楽歌がきこえてくる。いよいよ二十年間お鎮まりの正宮を出御あそばされるのである。緊張が背すじを走る。参列員たちの柏手の音が前後左右から一斉におこる。咫尺の間をお渡りになってゐる気配に、ひたすら低頭しつづける。気がつくと背中のあたりが後ろの人に押されてゐる。筆者を押してゐる人もその後ろの人も、それぞれに押されてゐるにちがひない。

御儀をもって聖上御遥拝の御儀がとり行はせられてゐるはずである。皇居の空にもこの明るい月光がふりそそいでゐることであらう。

○

顧みると、当度の御遷宮に関して大宮司より宮内庁長官にお伺ひ書が提出されたのが昭和五十九年三月で、翌四月七日、御聴許の旨が長官より達せられて正式に御準備の作業が開始された、と承る。しかし、内々の準備はさらにその八年も前から進められてゐたやうに伝聞する。いふならば、第六十回のことが終るや否や、神宮司庁の当局では次なる手順が考へられたのであるがそれはさておき、正式に申してもまさに十年の歳月をかけての大事業である。

その間、両陛下よりは年ごとに御内帑金の御献進をたまはり、広汎な奉賛活動が神社界、財界そのほかの諸団体によって展開されたことは申すまでもない。御用材は御杣始祭をまってゐては到底まに合はないので、これまた早くから御杣山候補の山々で伐採されてゐたはずである。御装束、神宝の発注も相ついで行はれたにちがひない。それに御杣代木奉送、お木曳き、お白石奉献などと、直接に行事に参加した人人も夥しい数にのぼるであらう。かうして数へ上げてみると、その関はった人々の何と広汎にわたったことか。そして、それぞれの人々が、二十年一度の好機と感激しつつ、それぞれの方法でささげてきた神忠がこの清らかな一夜の厳儀と凝って、いま、めでたく現前したのである。

○

千三百年間のわが民族の経てきた道程は決して担々たるものではあり得なかった。天災もあれば内戦も外患もあった。しかもなほ克く父祖の伝統を守り伝へてここに第六十一回に至った、この持続の原動力は、そもそも何処に存したのであらうか。

世界文明史上の奇跡ともいふべきこの現象に、海彼の有識者たちも更めて眼をみはってゐるにちがひあるまい。天皇国日本の有難さをしみじみと肝に銘じた一夜であった。

（神社新報より）

秋の深まりが感じられる十月十七日、第十四代表千家家元千宗左（而妙斎）宗匠御点前により献茶祭が斎行された。

この献茶祭は昭和三十七年十月、当時の宗像大社復興期成会々長故出光佐三氏の御尽力により、第十三代表千家家元、即中斎千宗左宗匠が奉仕して以来、今年で二十九回目の奉納となった。またこの日は伊勢の神宮における神嘗祭の佳日でもある。

当日早朝より福岡県内はもとより、九州各県山口県などから約千五百名の茶道にいそしむ人々が表千家家元の御点前を拝見しようと大勢の人が集まった。

定刻午前十一時、斎館玄関の大太鼓を合図に、斎館前庭より山田祢宜以下奉仕神職が参進、勅使館から表千家家元、家元介添の前粥、出光興産株式会社出光昭介会長外会社役員、九州同門会々長外幹部役員等が参進、祓舎にて修祓を行い本殿へと進んだ。

拝殿周囲は和服姿の女性で埋め尽くされその雅やかな色彩が社殿に一際映える。

今年は御点前がなるべく多くの人に見える様に数台のモニターテレビが設置された。

昇殿後、斎主の祝詞奏上次に献茶、拝殿中央白木の台子に据えられた風炉の前に宗匠が端坐する。

参列者の一同の目が一点に集中し満場セキとして声もなく、時として風炉の松風が聞こえる。それがかえってこの場の静けさを強調する。宗匠は、まず炭斗をもって炭を直し、極自然に御点前がなされる。金箔の茶碗に濃茶、銀箔の茶碗に薄茶がたてられ、三管の雅楽の調べの中、神職の手によって神前にお供えされた。一時間余りの静寂が流れ、あちらこちらから溜息がもれる。各々が様々の感銘を受けた様子で互いにささやき合い、安堵の空気が参列席に流れた。続いて斎主、家元、出光会長等の玉串拝礼が行われ祭典は滞り無く終了した。

この後、儀式殿では出光席、斎館では同門会席が設けられ、参加者はこの両副席で掛軸や茶道具の逸品を鑑賞しながら、茶の湯の醍醐味にひたり、神都宗像の秋の一日を優雅に楽しんだ。

古式祭のご案内

古式祭とは、今年最後の収穫感謝祭のことです。氏神様へ一年間の神恩を感謝して今年の収穫物を捧げ、忌火で炊いた御飯をお供えし、氏子の人達が一緒にいただく神事です。

この神事は、宮中に於て陛下が神嘉殿にて新嘗祭を行われておられるのと同じ性質のものです。

この古式祭は又「延命招福」の集いともいわれますが、氏神様と共にこの一年間の喜びを分かちあうといった「神人和楽」を共にする、年に一度の集会であることに意味があります。

八百年以上の伝統をもつ宗像大社の古式祭には、特にお菓子と呼ばれる、九年母、菱餅等で作られた特殊神饌や、江口の浜よりあがるゲバサモという海藻をお供えして、お座を催すのが古来からのしきたりです。又くじが行われ、翁面・御神盃などが授与されます。

記

一、日　時　十二月十五日（水曜日）
　　祭典　午前六時
　　お座　午前六時三〇分～午前九時
　　祭典　本殿　お座　清明殿
一、場　所
一、お座料（一名分）　白米一升又は金五百円

余滴

「衣食住足りて礼節を知る」という言葉がある。即ち人間が人として生活をしていく上での最低限の条件である。人はこの条件を満たす為に国家社会の一員として、秩序を保ち礼儀を重んじ己々に適した労働に就き代償を得て、生涯を平穏に終えることが理想である。

今日世界中では何百万人の人々が飢餓に苦しみ死んでいる。我国でも地震台風、冷夏長雨と自然災害が多発、家屋財産の消滅、農作物の被害も莫大で尊い人命まで犠牲となっている。文明が進歩し経済が発展しても自然の偉大な力の前では人間は微力な存在である。

昨今のマスコミに「米泥棒や闇米流通」の事件が報道されている。昭和二、三十年代の話ではなく経済大国を自認する現在の日本国に於いてである。戦後ある著名政治家が「貧乏人は麦飯を食え」との迷言を吐き国民の総反撃を受けた。

現代の我国の農業政策は豊作になると「減反転作」に、不作の時は「増反増作」を奨励する猫の目の政治行政に左右され、遂には他国より「輸入自由化」の攻勢を受け、「自国で自給自足の穀物を作る大切さ」を知る農業を志す人々の意欲を衰退させ、国民総サラリーマン化を来たしている。

我国は古代より「瑞穂の国」と称えられ、春夏秋冬の自然に恵まれた四季の中で、農業国として繁栄してきた国土と、神佛を崇拝し自然の営みの中で耐え凌ぐ五穀の作物を一致団結し育成することの大事さを知る国民性を、今一度自覚することが肝要である。

第三八九回　宗像大社歌会詠草

中村吾郎選

毎月末日〆切

大島　河野　英子

台風に二つに折れし野牡丹の今朝瑠璃色の花ほころびぬ

（評）二つに折れた野牡丹といえども生命を保つ。花の綻びを見て驚き詠みあげられた。その気息を思う。

日の里　後藤　君代

刈萱の踊るがごとく立てる穂を手折りてかへる今朝の歩みに

（評）散歩の道すがら見た萱の穂を『踊るが如く』と比喩した。手折った萱の穂はもう、作者の手の中。

池田　小田　いせ

掻き交ぜて漬けたる糠味噌押さえつけ手形残して明日をまたむ

（評）掻きまぜた糠味噌の下には何が漬けられたのであろう。『手形残して』が漬物の味まで思わせる。

田熊　鷲頭かつ代

わが日日と共に在り経し古時計捨てむと決めてふた月過ぎぬ

大島　杉田　禮子

傷心だきて帰り来る娘を待つ夕べ葱ぎざみつつ言葉を探す

福岡東　桜井　ツ子

秋ふけし島の港の朝明けに鳶の声ひびく山の方より

吉留　白木うめの

五十年この山畑に親しみて大根を播き芋を作りぬ

福間　池浦千鶴子

鴇色の椿も片方の小社もタイムマシンに母の生家へ

福間　本松　宣子

一隅に分葱を植ゑて幾日か秋雨に濡れ緑の立てり

自由ケ丘　津江富美子

山の端を今昇りゆく日輪の激つくれなゐ辺りを照らす

鐘崎　安永　久子

袖とおす夫が肌着の裾のはし形見となりぬ子の名書かれたり

武丸　中村さつき

午前五時ベランダに立ち秋晴の煌めく星を久々に見る

福間　二宮　末子

関門のトンネル歩く賑やかに老人クラブの人の達者さ

大島　目原　節子

靄おびて重畳の峰聳え立ち濃淡親しみ高原をゆく

徳重　石松や寿子

四國迄も續く大橋二度くぐり架橋技術の偉大さを知る

原町　八波　五月

敬老会子孫の若き区長よりまた来年もと御酒をいただく

大島　屋形とみえ

父母を思ひ永遠の平和を願ひたる特攻勇士の遺書に涙す

名古屋　小田　留子

年毎に歩幅の狭くなるわれか街角のミラーにふと映し見る

自由ケ丘　細川　絹子

山の端に朝日かかりて池の面に映る太陽輝き反す

福間　昆　コヨ

山間の滝は瀬となり流るるを目に追ひながら暫く歩く

城南ケ丘　中間日出子

車道横に積まれし廃車うらやみて走る車を見ているごとし

須恵　馬場　ヤヲ

香椎宮の祭りに友と献花なす日差を受けて神光りをり

赤間ケ丘　松本　澄子

柔らかき棹売の声風にのり長く流れ来厨にゐれば

福間　山田よし子

童等が橋の上より糸垂らす釣りし獲物は殿様蛙

第二十三回 西日本菊花大会

農林水産大臣賞に 大輪部門　池田　昭氏（八幡西区）

宗像大社秋の神賑行事として行われている、西日本菊花大会（主催・宗像大社菊花会、後援・福岡県他）も、本年で二十三回を迎え、西日本はもとより全国各地の菊花愛好家の関心を集め、十月三十一日より十一月二十日迄当大社境内の特設会場に於て、盛大に開催されている。

本大会開催に当り、十月二十四日、宗像地区商工会青年部並菊花会々員有志（約一二〇名）の奉仕により、展示用ハウス一〇〇余棟が神門前境内に特設され、三十一日には、福岡、佐賀、北九州、遠賀、粕屋、宗像各地の協賛会社により提供されたトラック五十数台により、福岡県内を始め、九州各地の愛好家が丹精込めた銘菊三〇〇〇余鉢が搬入され、宗像青年会議所会員の奉仕により菊花の荷下し作業が終日行われた。

本大会の特色は、出品鉢数、参加者数はもとより、作品品質の優秀さ、種類の豊富さ、会場設備の充実等、文字通り西日本随一の菊花大会として自他共に認められており、又、競作展としても全国に例を見ない権威あるものとして斯道関係者の間で関心を集めている。

又、本大会の優秀さを決める審査会は、十一月一日午前十時より室園正敏福岡県農業試験場園芸研究室長を審査長に、同所小林泰生花キ花木室長、谷川孝弘研究員、松井洋研究員、樋口茂四郎県花キ専門技術員、藤本鷹光日本盆栽協会福岡支部顧問を審査員として、公平かつ厳正な審査が終日行われ、各部門別に一位より最下位までの順位が決定した。

第二十三回西日本菊花大会最高位の農林水産大臣賞は審査員合議により全員一致で大輪部門第一位池田昭氏に決定した。

尚、各賞の受賞者は次の通りである。

農林水産大臣賞
大輪部門
池田　昭　八幡西区

文部大臣賞
盆栽部門
阿部　正士　遠賀郡

通商産業大臣賞
懸崖部門
石松　正廣　南区

運輸大臣賞
特作部門（自由花壇）
末次　勝記　若松区

内閣官房長官賞
特作部門（一文字花壇）
船越　順一　大野城市

科学技術庁長官賞
特作部門（古木添木作）
櫻木　為生　田川市

環境庁長官賞
特作部門（小品盆栽）
早川　香雪　八幡西区

大会大賞
特作部門（千輪咲）
大穂　正義　城南区

宗像大社宮司賞
大森　敏　宗像郡（大輪）
藤原友男　遠賀郡（盆栽）
石田御年　粕屋郡（懸崖）
吉田　耳　宗像郡（特作）

九州農政局長賞
高田太助　八幡西区

福岡県知事賞
山田英水　宗像市、猿渡俊光　大牟田市、浜田成男　粕屋郡、渡辺道　直方市、時田義光　鳥栖市

熊本県知事賞
後藤雪翠　熊本市

長崎県知事賞
田中祐成　佐世保市

福岡県議会議長賞
高椋良和　遠賀郡、高島雪茂　遠賀郡、石田俊延　粕屋郡、縄田誠一　嘉穂郡

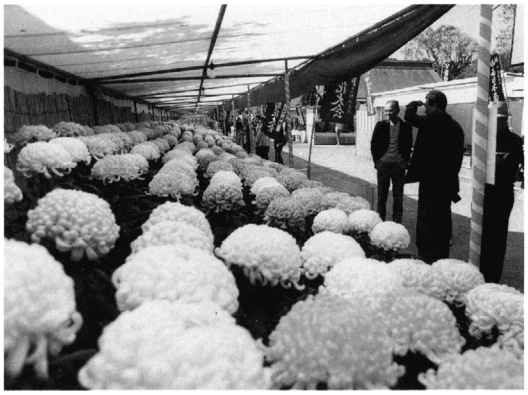
福岡県町村会々長賞
船越順一　大野城市、吉田松雪　八幡西区、池口盛信　八幡西区、平石勝　八幡西区、大穂絹子　城南区、平田泰輔　博多区

九州花卉御売市場連合会会長賞
川崎正木　嘉穂郡、今村忠文　八幡東区、蔵田幸雄　八幡西区

福岡県農業協同組合中央会々長賞
大穂正義　城南区、伊藤年春　中間市、金子黄頴　佐世保市、大保弘信　直方市

福岡県観光連盟会長賞
許斐保　飯塚市、山崎巌　飯塚市、井上裕弘　宗像市、高山包夫　宗像市

福岡農林事務所賞
要博文　遠賀郡、田中和夫　遠賀郡、蔵田幸雄　八幡西区、宮小路喜彦　宗像市



福岡県町村議会議長会々長賞
大保弘信　直方市、田中恒雄　小倉南区、森智俊　粕屋郡、原田雪嶺　小倉北区

福岡県教育委員会賞
福添利治　大牟田市、長井芳雪　八幡東区、小金丸登　糸島郡、古波蔵正忠　八幡西区

全日本菊花連盟賞
山口義實　八幡西区、徳永重義　城南区

九州・山口花卉園芸連絡協議会々長賞
辻野好房　飯塚市、山口義實　八幡西区、大穂絹子　城南区

九州旅客鉄道㈱賞
田中和夫　遠賀郡、穴井利之　直方市

福岡県花卉園芸連合会々長賞
永島文男、藤正邦、久保文義、末次勝記

福岡県花卉市場協議会々長賞
鎮守成明、中村昭、石橋善治、三口澄夫

粕屋郡町長会々長賞
本田国雄、最所孝子

遠賀郡町長会々長賞
本田国雄、波多野松男

宗像郡町村議長会々長賞
宗像地区商工会青年部賞
馬場園馨、桐野幸雪、中村昭、田中祐成

遠賀郡町長賞
阿久根力、木村正明

芦屋町長賞
三口澄夫、波左間稔

水巻町長賞
高山健次、高橋辰雄

古賀郡町長賞
車石裕、渡辺道

宗像市長賞
門司明徳、浜田豊子

津屋崎町長賞
緒方順孝、成富明

福間町長賞
西山時秋、中山文子

玄海町長賞
池上福元、安藤達男、竹内雪豊、中原貞次、矢野茂、馬場園馨、高椋良和、緒方貴久子

大島村長賞
森口国利、原田雪嶺

玄海町観光協会賞
下村運、山根正雄、中尾利夫、石田佳子

宗像大社菊花会々長賞
吉田耳、広渡二富、吉住萬吉、西村繁芳、梶原貞雄、千々和正信

遠賀郡農業協同組合長賞
古賀春次、斎藤辰次

宗像農業協同組合長賞
伏買喜久男、川島邦博、田代定、竹内雪豊

津屋崎町商工会々長賞
太田啓

宗像市商工会々長賞
田畑実志

福間町商工会々長賞
工藤孝男

玄海町商工会々長賞
綱脇貞子

大島村商工会々長賞
長崎弥太郎

宗像大社氏子会々長賞
山本義雄、村井猛男、永島文男、藤波魁三

玄洋福岡ライオンズクラブ賞
田中定吉、古波蔵正忠、綱脇貞子、吉武皐月

神湊旅館組合長賞
山本馨、久保田勝巳、猿渡俊光、千々和正信

宗像青年会議所賞
石田御年、安永儀三郎、守田広男、波多野松男

宗像地区商工会青年部賞
永田ツルミ、池口盛信、最所孝子、成富明

中原ガーデン賞
川崎正木、古賀春次、阿久根力、山本馨

㈱サカタのタネ賞
吉武皐月、矢野茂

入選
西山時秋、鈴木輝夫、田中定吉、伏買喜久男

佳作
山本義雄、福添利治、堤勇孝、山崎巌、田代定、安永儀三郎

重複入選
古波蔵正忠、成富明、阿久根力、田中定吉、大保弘信、西山時秋、村井猛男、山口義實、波多野松男、高田太助、安永儀三郎、蔵田幸雄

特別賞
玄海町立玄海中学校
宗像市立中央中学校
宗像市立河東中学校

尚、二十一回大会より設けている全出品者の中より選ばれる。本年度の最高齢者賞は昨年に引続き糸島の藤波魁三氏、明治三十五年生、九十一歳」が受賞、藤波氏は高齢にも拘わらず千輪咲を出品、表彰式当日高田会長より表彰状並記念品が贈呈された。

【第二十三回西日本菊花大会特別奉納花壇】
門司菊友会、若松友会、北九州菊花芸術協会、小倉菊友会、八幡南部秋芳会、八幡西部秋芳会、筑豊菊友会、粕屋菊友会、福岡市菊花協会、池上福元、秋本光司、馬場園馨、最所孝子、蔵田幸雄

【庭園奉納花壇】
高田太助、高島雪茂、古波蔵正忠、千々和正信、本田国雄、平田泰輔、川崎正木、小島文男

造園士　玄海町吉武造園

【第二十三回西日本菊花大会協賛会社】
出光興産㈱、㈱新出光、国松石材㈱、臼杵運送㈱中九州支店、福岡営業所、箱崎営業所、門司支店、西久大運送㈱、久留米運送㈱、西鉄運輸㈱、平和産業㈲、宗像貨物㈲、㈱宗像グリーン、本田工業㈱、㈱弘江組、㈱城山家具、吉武造園㈲、貞兼運送㈲、久田運輸㈱、東郷自動車整備㈲、㈲篠原産業、楠建設、マルヨン醤油、ナカマル醤油醸造元、龍栄運輸㈲、第一運送㈱、㈲遠賀運輸、北九州開発㈱

以上大会開催に際しましては、皆様の御厚意、御協賛に対し、紙面を以ちまして厚く御礼申し上げます。

一誌一話 (29)

伽倻を訪ねて(二)

樂　岔　子

八月も終りの或る日、鉄文化圏の旅についた。目指すは朝鮮半島南の中央部慶尚南道を北上する四泊五日の旅である。ここがいわゆる古代の伽倻地域である。

雨で霞む板付空港を三十分遅れで飛び立ち、金海国際空港まで45分。雲海をぬけ平行飛行で「フー」と一息つき、昼食のサンドイッチをかじっていると急降下しだした。雲の中から飛行機が顔を出すと、快晴の釜山港いったいの海上が目に入った。大小の船々が動きまわり、息づく様子が手にとるような賑わいである。まるで箱庭を見るようだ。

広い洛東江を間にして釜山市と金海市が向い合う、韓国南部の海と空との玄関である。空港からバスに乗り、一路「六伽倻時代」の古都晋州へと向う。

一時間三十分走りバスは晋州市へと入いる。晋州は伽倻時代に栄えた古都であるが、今は人口三十万人の韓国の中都市である。

晋州市の中央部を南江が流れ、この河州に沿って晋山城が立つ。この城を豊臣秀吉が朝鮮出兵の時（慶長の役―一五九七年―）、加藤清正が攻め落としたという。李朝朝鮮の人々がその時に立て籠った城である。この戦さの模様を銅板に彫り込み、大世義塔の台座を取り廻して張りつけてあった。

城は日本の城と違い、中国の城郭や沖縄の首里城と同様に高い土壁に囲まれて造られている。高い大きな正門を通り中に入いる。城内は度重なる戦災で当時の建物はすべてなくなっている。いまは公園化されて木々と芝生に覆われ、ハイキングや遠足又市民の憩いの場として利用されている。左側は断崖で眼下に見下すと、金海市から朝鮮海峡に流れ込む大河洛東江へと続く南江はゆうゆうと流れている。崖の近くに休息所となっている旧学問所矗石楼（ちょくせきろう）がある。これがわずかに残る昔い建物の一つである。

城内の一番奥には一九八〇年に開館した地下一階・地上二階の晋州国立博物館がある。ここには晋州市とその周辺部の地域の考古資料を中心として展示公開されていた。先年福岡県立美術館の特別展「伽耶展」に多く出品されていた同様の品々を再び現地でみることが出来た。丹塗で前期の弥生式土器の長頸壺、仿製で伝世されていたと思われる小形内行花文鏡、巴形銅器、馬具をはじめとして、大小の鉄鋌、中には小形の物を井杵に組んだのもある。大形鋳造鉄斧、蛇行状鉄器・金製王冠・腰佩・有刺利器等々、あらためて見入った。

なかでも陝川磻溪堤力A号墳出土の「冠帽形鉄冑」の後背には鳥の羽根等を飾り付ける金銅製筒形棒状品を鋲留しているが、これは沖ノ島七号遺跡で馬具や金指輪と一緒に出土した「屈曲棒状品」と類似品である。この時期の沖ノ島祭祀は朝鮮との交流期であった為に、半島からの渡来品が多く奉献されている。

種々の鉄器・馬具に混って日本製や日本式も出土していることが、この館の展示でより鮮明に感じた。古代の友好交流が半島南部の国々とかなり広い範囲だったことに一層興味を引いた。

沖・中両宮秋季大祭

神賑い一色の筑前大島

十月二十九日（金）、当大社沖津宮・中津宮の秋季大祭が厳粛に斎行された。

大祭の準備は九月初旬の注連縄用新藁収集から始まった。沖中両宮奉賛会役員並びに同翼賛会、敬神婦人部総出により藁干し、藁すぐりと続き、十月九日には地元農家の助勢も得て真新しい注連縄が調製され、早速中津宮本・拝殿、御嶽宮に懸けられた。更に二十七、二十八日の両日には、沖津宮遥拝所、御嶽宮、中津宮の清掃と社殿装飾、奉納演芸舞台設置等の諸準備を奉仕、翼賛会も神賑行事の準備を行い、後は大祭を迎えるばかりとなった。

二十八日午後二時地主祭、同五時には沖津宮宵宮祭と中津宮宵宮祭を各々斎行、明日の大祭が無事執り行われるよう祈念された。

翌二十九日、生憎の雨模様となったが、午前八時半厳島神社秋祭、同九時半沖津宮秋季大祭、同九時半御嶽宮秋祭を斎行、同十一時中津宮秋季大祭が斎行された。

斎館前庭に列立した宮司以下神職、奉幣使、巫女と奉賛会役員・参列者が拝殿へと参進、所定の座に着くと祭典が始まった。修祓、宮司祝詞奏上に続き奉幣使藤島彦四郎氏が奉幣詞を奏上、巫女が浦安舞を奏し、玉串拝礼を以って祭典は滞り無く終了した。

祭典に引き続き表彰式に移り、福岡県神社庁功労者表彰を受けられた奉賛会副会長福原鶴夫氏の表彰に続き、拝殿紫幕奉納の沖西敏明氏、神門紫幕と門帳奉納の山口一松氏、辺津宮へ龍貝細工奉納の沖西弁蔵氏、注連用新藁奉納の遠藤英樹氏、更に永年奉賛会役員としてご尽力いただき本年春季大祭後退任された遠藤沖之助氏と沖西弁蔵氏の各氏に感謝状と記念品が贈呈された。

続いて参列者は照海殿へ移り、刺身、かしわ弁当、吸物等敬神婦人部の手作りによる直会に話もはずんだ。

神賑行事は奉納子供相撲大会が雨天の為中止となったが、奉納演芸大会は舞台を総合センター大広間に移して開催された。昨年は止む無く見送られたものの、本年は区長を始め各方面の協力を得て再開された。各区代表、田志里一座、中村社中等氏子による演芸に、拝観者は大広間に入り切れない程で大いに賑った。演芸は舞踊、歌謡と大人から子供迄、飛び入りを加えると二十数番が披露され、やんやの喝采を受けていた。

一方中津宮境内では翼賛会による、くじ引き、ヨーヨー釣りが行われ、午後の授業が休みとなった子供達がさかんに興じていた。

演芸大会も午後四時半前には終了、神人和楽の神賑い一色となった大島の秋の一日は、雨上りと共に暮れなずんで行った。

第二十二回 奉納剣道大会

錦秋の陽光を浴び、境内に菊の香りを漂わせる中、恒例の秋季奉納剣道大会が開催された。

秋の大会は個人戦である為、宗像市郡内の小学生から大学生までの男女が殆ど参加し、今年も五百名を越える人数となった。

試合に先き立ち参加選手全員で正々堂々と健闘することを誓い代表者に合わせ、神前に拝礼した。

試合は男女別の十四区分、六パートに分かれ、まず決勝トーナメント進出の為に三人抜かなければならない。

今大会、数多い好試合の中、一際目を引いたのは、中学生女子の部で優勝を争った高向姉妹であった。この二人は、今年の夏、京都で開催された全国大会に団体の選手として出場し、ベスト十六位まで勝ち進んだメンバーで、予選では他を全く寄せ付けず三人抜き、決勝トーナメントでも順当に勝ち進み、予想通りの姉妹対決戦となり、メンにスピードと威力がある姉のほうに軍配が上った。

かくして早朝より境内に響き渡った竹刀の音も止み本年の大会も無事に終了した。

尚各部の成績は次の通りである。

男子の部

小学一年生
優　勝　坂本泰基　日の里東
準優勝　石松大輔　東部
三　位　村田潤一　東郷

小学二年生
優　勝　久保田毅　日の里東
準優勝　瀧下靖浩　赤間西
三　位　高野剛久　玄辰館

小学三年生
優　勝　権田義明　岬
準優勝　神多宜彰　東部
三　位　梯　達斎　河東

小学四年生
優　勝　伊藤　修　南郷
準優勝　猪頭朋也　南郷
三　位　宇都宮信幸　玄海

小学五年生
優　勝　吉廣精人　赤間西
準優勝　河野良輔　河東
三　位　中橋功介　赤間西

小学六年生
優　勝　倉地研介　赤間西
準優勝　安部　豊　岬
三　位　瀧下賢一　赤間西

中学一年生
優　勝　溝上直也　玄海
準優勝　田島久生　城山
三　位　土手竜司　玄辰館

中学二・三年生
優　勝　村田将則　城山
準優勝　山本　守　城山
三　位　福田展也　日の里

高校・大学生
優　勝　村上誠二　福教大
準優勝　森　瑞樹　福教大
三　位　坂下和長　宗像

小学一・二年生
優　勝　赤星マミ　東部
準優勝　眞武千郷　南郷
三　位　中村智子　南郷

小学三・四年生
優　勝　城野朋子　南郷
準優勝　吉武留美　河東
三　位　岩尾有紀子　玄海

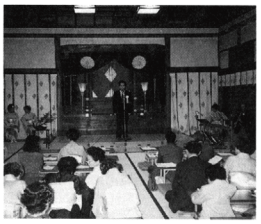
小学五・六年生
優　勝　中村麻衣子　東郷
準優勝　吉田千沙子　東部
三　位　小宮まどか　東郷

中学生
優　勝　高向統子　玄海
準優勝　高向瑞恵　玄海
三　位　安部涼子　河東

高校・大学生
優　勝　西佐知子　宗像
準優勝　本堀あかね　宗像
三　位　白水志鶴　福教大

第十九回 奉納吟剣詩舞道大会

明治節の佳き日に、恒例の奉納吟剣詩舞道大会が清香吟社の主催により、清明殿に於て午前九時より会員百名参加の下、盛大に開催された。



当日は秋晴れに恵まれ、三阡鉢の菊花が境内に馥郁と咲誇る中、午前中は、清香吟社の地元宗像地区や遠く熊本本部の会員が、日頃鍛練した自慢の喉で、今日の晴舞台に「名槍日本号」・「菊花」・「余生といった多彩な吟を、精一杯披露されていた。

午前十一時半よりは、御本殿にて奉納吟剣式が斎行され、会員勢揃いしてお祓いを受けた後、先づ、清香吟社会長益田鵬山先生が、「宗像大神」を御神前に朗々と奉納、続いて宝山会々長福家宝山先生が、力強い「剣舞」を奉納、最後に会員全員にて「吟道」を合吟すると神奈備に響き渡り、参拝者はその迫力に足を止めて聞き入っていた。

午後よりは、会場の清明殿に移り、先づ構成吟「戦国の詩」が披露、地元福間地区の女流剣士等が熱のこもった剣舞を披露、戦国武将の心情を生々と表現、観客を戦国の世界に誘っていた。

大会もクライマックスの、師範の先生方の洗練された吟や剣舞が奉納されると、拝観者一同、日本の伝統文化のすばらしさに深い感銘を受けている様子であった。

今大会も、会員の皆さんの熱意溢れる奉納で、日本の心が生々と表現された大会となり、来年の二十周年大会の一層の飛躍を会員一同誓い合って、午後五時大会を終了した。

伽耶（カヤ）文化研究会 宗像のオガチ会

市民レベルの姉妹縁組

宗像市郡中学校の元役員で作る市民グループ「オガチ会」（柳瀬幹雄会長、30名）と、韓国・金海市の伽耶文化研究会（宋在出会長、30名）が去る十月二十日、宗像市の〝正助ふるさと村〟で姉妹団体縁組の調印式を行った。

宗像地方では、近年日韓交流が盛んに進められている。古代からの九州北部と、大陸との文化交流をともに研究している両国の郷土史研究文化団体がさらなる親交相互理解を深めようと、行われた縁組調印式である。

オガチ会は、去る平成元年、宗像市郡の中学校（十校）PTA役員をした約三十名が集い〝宗像の文化を語り合おう〟と結成された会である。

会名は「海の正倉院」として知られる沖ノ島（宗像郡大島村）に渡島し古代祭祀遺跡を見学研修した折、一行の船を出迎え歓迎してくれた同島生息のオオミズナギドリを地方俗称〝オガチ〟と呼ぶところからこの会名とした。又伽耶文化研究会は韓国・金海市の歴史研究家、医師、実業家、マスコミ関係者など地元の知名士三〇余名で構成されている郷土史研究会で、現在、文化財保護のボランティア活動などを推進し活動している。

伽耶文化研究会一行は、当大社神宝館で〝沖ノ島祭祀遺跡〟出土の祭器具等を見学し、佐賀県吉野ヶ里遺跡、福岡市博物館、金隈遺跡などを見学研修して無事帰国された。今後両団体のさらなる相互理解を深められ、両国の親善と世界平和に貢献されんことを祈ります。

お便り

拝啓、去る十月一日の宗像大社秋の例大祭が神威の普く処、皇太子殿下の御成婚、第六十一回伊勢神宮式年遷宮のよき年に相応しく青空の下盛大に差無く斎行され、おめでとうございました。

当社氏子が昭和五十六年から隔年にお詣りさせていただき今年は第九回を数えました。年毎に大神様のありがたさに感動感激し口から口へと伝えられ、参加者はいつも五十名を越える状態です。今年はいろいろの都合で四十六名になりましたが、その節は何かと御配慮すみませんでした。お蔭様で老会者の相当居りますがいささかの事故も病気もなく元気に帰着出来ました。天候にも恵まれ一同神様のおたすけと喜んで居ります。今日はまた御心にかけられ、初穂料奉奠の證に接し御丁寧にも御神葉をお送り下され、厚い御心のほど有難く丁戴いたします。

その昔、秩父山系に水源を発し関東平野を潤す荒川の氾濫を治め、舟運の便を守り、平野の農耕を助け、豊穣を念じ、御社の御分霊を此の地に勧請申し上げた古人の心を偲び、何か尊い神慮によって御地と結ばれたよう思われて、今后も大切にしたいと思って居ります。

いづれにせよ、時代が美醜正邪善悪を交々無際に混合して押し流れうつり変わる現代で此の年を節目に報本反始神道の始に反り本を大切にして変わる中に変わらぬものをしかとつかんで後世に伝えたいと思って居ります。

御社の皆様の御健康で御つとめのほどを祈ります。感激のあまり参拝者一同に代わり御礼申し上げました。

埼玉県　宗像神社
宮司　藤田　薫

社務日誌抄

十月一日～三日　宗像大社秋季大祭
十月一日　織幡神社祭
埼玉宗像会藤田宮司外四十五名参拝
JR九州赤間駅参拝団八十名参拝
出光石油化学㈱元会長大和丈夫氏、出光興産㈱元専務麻生和正氏並同店主室々長福用和雄氏参拝
十月二日　櫛田神社阿部権宮司参拝
十月三日　伊豆・小山県議会議員、滝口宗像市長和田玄海町長等参拝
十月五日　縫殿神社祭
日の里西小学校一三三名遠足にて来社
十月六日　西鉄福岡営業部一五〇名参拝
出光タンカー㈱大嶋丸宗像大神鎮座祭、太田権宮司外二名出向奉仕
十月七日　出光タンカー㈱大嶋丸宗像大神鎮座奉祝祭、前記神職出向奉仕
十月八日　山本工作所百余名参拝
十月九日　出光石油化学㈱取締役子葉工場長鎌田博義氏参拝
十月十三日　八代市博物館・櫃原考古博物館、北九州歴史博物館有川学芸員来社
㈳日本損害保険協会講師大野稲三氏参拝
青峰小学校五年生八十名来社
十月十四日　出光興産㈱札幌支店加藤武志氏、北海道光運会・出光北海道陸上輸送協力会々長
十月十五日　岩倉博氏外十五名参拝
十月十五日　月次祭
太宰府天満宮との懇親野球大会
十月十七日　献茶祭
表千家家元而妙斎千宗左宗匠奉納・出光興産㈱会長出光昭介氏外関係者・表千家福岡同門会役員等参列
十月十八日　自治省財政局調整室長林省吾氏外四名来社
十月十九日　玄海町消防団
秋季大祭警備反省会
大野城市歴史教室三十名来社
十月二十日　新潟光運会々長吉沢清次氏外十二名参拝
十月二十一日　出光興産㈱岸和田油槽所、岸和田協力会迫田義和氏外六名参拝
十月二十四日　宗像地区商工会青年部六十名・宗像大社菊花会役員及宗像菊友会六十名菊花展示ハウス建設作業奉仕
十月二十七日　大和リゾート㈱玄海ロイヤルホテル開設準備委員長岡嶋聰氏、副委員長光嶋博氏来社
十月二十八日　北九州市八枝小学校PTA五十名参拝
十月二十九日　九州地区国立大学教育学関係教授十五名来社
十月三十日　出光興産㈱北海道製油所々長石上尚希氏外二名参拝

宗像大社歌会 俳句作品集（三六八）

ひかりケ丘　南　風生
晩鐘の余韻熟柿のひとつ落つ

若　松　井手　清隆
補陀落の海渺々と鳥わたる

福　間　高橋辰次郎
月高く夕陽も高し稲を刈る

藤　沢　井上　玄洋
踏み砕く足裏くすぐるまてばじひ

福　間　森　清
縁台を一人占めゐて夕涼し

自由ヶ丘　細川　絹子
投げられし石に乱るる月の影

田　熊　力丸　一郎
石蕗が黄の花写すにわの池

福岡中央　力丸　玄風
鵙鳴くやここに文士の絶筆碑

日の里　花田いつ枝
分け合ひて舌まろやかに零余子飯

津屋崎　井浦　良介
冬近し図書室に行く小走りに

（続）海外寄物 82

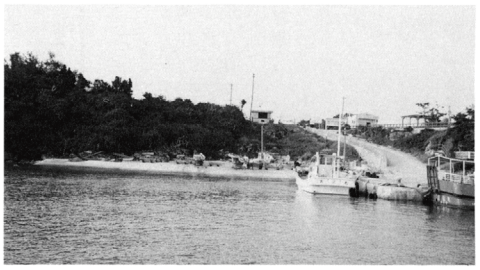
沖縄へ（一）

いしいただし

十月に一泊二日であったが沖縄本島へ行った。一日目は着いてから夕刻までは時間があったので、田崎聡氏とイザイホーの島・久高島へ行くことにした。馬天港から船に乗ろうとしたが船は出たばかりであったので、知念の海洋センターから船に乗った。

知念浜は二年前に、アメリカから投入されたビン（カリフォルニアから二年半かかって漂着した）を拾ったところである。護岸や堤防が出来て、景観はすっかり変化し、全体的には荒れた感じがした。

船は海上タクシーで、二〇分・往復二千四百円程度であった。少し波があったが船は快適に走る。前方平坦な島が見えてきた。やがて船は速度を落として接岸した。



久高島

久高島は南北にのびる細長い島で、北側にクバの原生林、南側に人家がある。この島を著名にしているのは一二年に一度の午年の旧暦十一月、イザイホーの神事があることで、まさに古代祭祀をそのまま残す神秘的なものである。（イザイホーの件については説明が長くなるので略）

港の近くに九十歳の老人が居て、毎日海岸へ出て漂着物を拾い、プラスチックボトルを加工して、家の周囲に飾っていると聞き、訪ねてみたが、一人暮らしの老人は入院中で会うことは出来なかった。家は錠がしめられていたが塀や周辺に、老人の作品がぐるりと掲げられ、風に揺れていた。ボトルを切って風鈴状にしたものである。あるいはプラスチックの板状のものは、船とかの形に切ってある。九十歳の老人のひまつぶしと言えばそれまでだが、漂着物も、こんな楽しみ方があるものかとアイデアに感心した。

自転車を借りて、島を一周してみた。家々の周囲はフクギが囲み、それが大きく成長していた。防風（防火）の役割を果している。アダンとモクマオウが多く道の両端に繁り舗装された道路はかなり島になされている。静かな島で、車と騒音が全然なく、別世界のようであった。

浜に出て見たら、断崖あり、グンバイヒルガオの繁るサンゴの浜あり、感動、感動の海岸の連続であった。

浜を少し歩いてみた。シャコガイやイモガイ科の貝が寄っていた。ココヤシの皮二個、上の方は海浜植物の生えているところに、流木、中国製のプラスチック浮子類が吹き上げられていたが、全体的にはたいした量ではない。

北の方から折り返して南側の方を下っていくと、舗装された道路から、砂砂利に出た。道路の端の海側砂丘の部分に貝殻が多く目につく。シャコガイ、イモガイ、スイジガイ、シリダカガイ等である。自転車をおりて、付近を歩く。貝殻の中央部付近には、穴がほがされたりしている。食用の時に身をとり出したのであろうか。砂丘上のヤブの中に入ってみると、多くの風化した貝が砂の中にある。地図を出してみると、アマミキヨの住居跡とある。砂丘を注意して見ると赤ボイ無文の土器片を採集した。器形が分かるほどの破片は採集しなかったが、一応サンプルとして数片拾ってきた。貝塚に間違いない。

「日本の古代遺跡・沖縄」（保育社、嵩元政秀・安里嗣淳共著）に久高島の遺跡のことが記されていた。同書によると、久高島には一二ヶ所の遺跡があり、発掘調査されたのはシマシヤーマ貝塚だけという。この貝塚は以前はアダンハミ貝塚とも呼ばれていた。一九五六年に国分直一氏によって調査されている。表土から基盤表層まで厚いところは一・五メートルもあったが、各層の時代的な差は確認されなかったようである。出土した土器は甕形と鉢形が主で、底部は尖底が多かったという文様は単純で多くは無文で沈線文や凹線による描文、刺突文がわずかに見られる。貝製品も出土し、シャコガイやリュウキウサルボウ製の貝錘、ヤコウガイ製の貝匙、骨針二本が発掘されている。私が見た貝塚は、ここなのかはっきりしないが、シャコガイやスイジガイの大型の貝類に本土に見られない南島のスケールの大きさを感じた。

久高島にて、漂着物の加工

久高島入口

宗像むかしばなし

朝鮮　慶州金冠塚の発見者

これは宗像人によって発見された、考古学上世界的に有名な慶州の金冠塚にまつわる一挿話。

大正十年（四十四年前）九月廿四日の朝、慶州大町通のあたりに運ばれた真新しい土をあさっている三四名の子供らがあった。何やら拾い集めている。そこへ一人の巡査が近付いた。そして子供らの採集しているものを見て驚いた。子供らの手には曲玉や硝子玉などが握られていたのである。

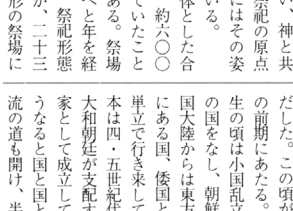
巡査は時を移さず土砂採取場へ飛んだ。現場はすでに封土が削り取られて見るかげもない。しかし一見大きな廃塚であることには間違いがない。周囲には人家や飲食店が立ち並んでいて、その軒下には金銀製品が山と積まれている。削土したのはその部分に新しい人家を建てる為らしかった。彼は突差に判断した。「これは王陵に違いない」早速削土の中止を命令し、本署に通報した。これを伝聞した総督府からは関根博士はじめ沢山の学者が駆けつけ、これが実地に学術調査をするきっかけとなった訳である。かくて一部散逸した遺品を除いてはその殆んどを回収することができた。俊敏な一巡査の処置が前述するように、世界的に有名な「旧新羅王朝の慶州金冠塚」の全貌を世にしらしめるに至ったのである。

現今、考古学は高校等で流行している。しかし古代の遺物を単なる「物」としてのみ見るという様な傾向がありはしないか。古代の遺物は、古代人の思想による所産であり、これら民族、人類の遺産というものは大切に保存され、その意味を よく考え、その意味を持った遺物の時代から現在が導き出されていることの意義を思索すべきであるという点が等閑視されてはいないであろうか。唯単に古い物を粗末に考え、粗末に扱うに至っては言語道断である。

ともあれ、そんなことを学んでさえいない一巡査の考え方が正しかったが為に・硬玉曲玉二三一個・真珠四五〇個・小玉三万個・腰帯・耳飾・食器等金銀色燦然たる豪華遺品が考古学上の貴重な遺産として保存されることになったのは喜ばしいことであった。

大正十三年、総督府発行の、京大浜田・梅原両教授による「慶州金冠塚とその遺宝」には「――東亜、或いは全世界においても最も著しい古墳発見品の一群という事が出来る」「これが世間に知られたのは同月廿四日のことで、実に慶州警察署巡査三宅与三君の周到なる注意に俟つことが多い」「若しくも三宅氏の此の注意が、二三日遅れたならば、貴重なる遺物が如何に危険なる運命に遭遇したか想像するに足るものがある」と激讃されている。その時の巡査三宅与三氏、宗像郡は上西郷の出身であった。

三宅氏は間も無く病を得て退官して故山に帰省した。二十四才の若さで世を去った三宅氏の此の功績を知る人は少ない。当時のジャーナリストに騒がれた人の、今は苔むした墓標を訪れる人も無いということである。



故郷の神宝

(4)

沖ノ島の祭りは、古代祭祀の時の様に豪華な奉献品とはいかないが、いまも尚当時を髣髴させる想いで続けられている。

島は自然を崇拝する原始信仰期の一つの形体である嶋與祭祀であるが、これは内陸で行われていた山岳や峠を祀る祭りと同様であり、形態や内容は同似であるとも言える。

古代の原始神道期に於ける自然崇拝による祭儀の型は、「一祭祀一祭場」「一祭祀一祭具」であったと、現代には言葉によってのみ伝えられてきているだけであるが、つまりは、「一度お祭りに使った所は、二度と祭場としては使わない」また、「一度神様にお供えされた奉献品は二度と人間は手をふれない。この様式が、神祭りを行い、神と共存している神道祭祀の原点である。沖ノ島にはその姿が今も残されている。

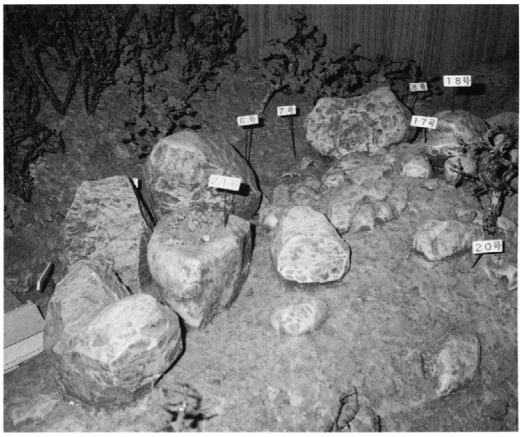
大和朝廷を主体とした合同の国家祭祀が、約六〇〇年の間続けられていたことは既存の事実である。祭場は岩上から露天へと年を経るごとに移動し、祭祀形態も変化してくるが、二十三ケ所からなる大形の祭場に奉献された品々は、永い年月捧げられた当時のそのまま の姿で、眠りつづけてきていたのである。

沖ノ島は古代から神が住う、神のみの島であり、忌を嫌い人を寄せつけない島とされ、祭りだけを行ってきた所である。ここでは四世紀頃より特に、外へ通うの進んだ文化がより多く導入されだし、一大発展をとげてくる。

対外へより近い直線コース「海北道」も開かれ、船も大形準構造船から龍骨と板組した構造船へと進み、多くの船々が航海するシルクロードの最終路となる。

沖ノ島はこの航路の標識としての役割を担い、人を入れない祭りの場、神の島とされてくる。

奉献品もいまは、辺津宮の神宝館で収蔵展示をし、一般公開を行っている。



これら古代祭祀が執り行われた祭場は、大きく四段階に分けることが出来る。

為の大規模な神祭りのみが、繰り返されて行われたのである。

四世紀の頃というと、近畿地方を中心として諸々の所に大型の古墳が築造されだした。この頃が古墳時代の前期にあたる。日本も弥生の頃は小国乱立の連合体の国をなし、朝鮮半島や中国大陸からは東方の海の中にある国、倭国と呼ばれ、単立で行き来していた。日本は四・五世紀代に入ると大和朝廷が支配する統一国家として成立してくる。こうなると国と国としての交流の道も開け、半島や大陸

一、岩上祭祀　一六・一七・一八・一九・二一号遺跡
四世紀～五世紀
一、岩陰祭祀　四・六・七・八・九・一〇・一一・一二・一三・一五・二二・二三号遺跡
六世紀～七世紀
一、半岩陰半露天祭祀　五・一四・二〇遺跡
七世紀後半～八世紀
一、露天祭祀　一・二・三号遺跡
八世紀～十世紀初頭

＜松＞